



Title	Antonio de NebrijaとAlonso de Molina比較研究
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1995, 19, p. 1-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Antonio de Nebrija と Alonso de Molina 比較研究

中 岡 省 治

1. アントニオ・デ・ネブリハとアロンソ・デ・モリナ

15世紀末のイスパニアに、カトリック両王の治政下に登場したアントニオ・デ・ネブリハは、その古典学者としての業績のみならず、当時、俗語とされ文法を与えられていなかったカステイリア語に「文法」を創出したという点でも、近代の文法史、言語史において高い評価を受け続けている。それに加えて、彼の「文法」は、ロマンス語文法の領域での最初の試みであったというだけではなく、近代ヨーロッパの諸言語の文法のなかでも先駆的役割を果たし、後の言語・文法研究の出発点を画したという点でも高い評価を与えられている。

15世紀のヨーロッパにあつては、俗語の文法が編まれ出版されることなど、予想もされぬことであつた。ギリシア語やラテン語の権威につねに脅えながらようやくその存在を維持していた俗語は、日常語、限られた地域でしか用いられぬことばとして、学者、研究者の研究対象にはなりえなかつた。このような固定観念を乗り越えて、俗語の文法を執筆・出版するのは、新しい試み以上の企て、まさに革命的な精神の芽生えでもあり、いわゆる「母語」の発見にもつながる偉業でもあつた。

ネブリハはその著『カステイリア語文法』の序文で、国家と言語との表裏一体的の関係を指摘し、世界の歴史をみるに、*Siempre la lengua fue compañera del imperio* 「ことばは常に帝国の胞友であつた」(Elio Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua castellana*, Salamanca, 1492)^(註1)と述べ、ことばが国家意識の発揚にどのような役割を果たすことができるか、をも暗示している。ネブリハは、15世紀末から16世紀初頭のイスパニアという歴史的現実を立て、イスパニア語が時の文化伝達の普遍的な手

段となるべき未来を予感していたのか、言語の体系的な教授・学習の必要性をも説いている。このような考えから、彼はカステイリア語を母語としない人達のためにも彼の文法書が必要となるときが来ると力説し、有名な次のような考えをイサベル女王に開陳している。「女王陛下様が異なることばを話す多数の人々や民族をその支配下に置かれたときに、その征服によって彼らは、征服者が被征服者に課す法律を、またそれに伴い我々のことばを受け入れる必要が生じたとき、そのとき彼らは、ちょうど私達が今日ラテン語を学ぶためにラテン語文法の技法 (Arte) を学ぶのと同じように、この私の技法によって、私達のことばを理解できるようになるであります」^(註2)、という思いは、その後約半世紀の後に新大陸各地の土着語の文法書、学習書、辞書の編纂にも活用され、彼がその『カステイリア語文法』の序文で予見した以上の重要性を発揮することになるのである。

そこで以下では、16世紀中葉に編纂・出版されたメキシコのナワトル語の文法書の一つ、アロンソ・デ・モリナ師著、『メキシコ語とカステイリア語文法』(Fray Alonso de Molina, *Arte de la lengua mexicana y castellana*, México, 1571)^(註3)を読み、その文法書としての内容構成、そこに用いられた用語、形態・文法範疇の設定などにわたって、ネブリハの文法理論がどのような形で活用されているかを概観してみようと思う。

さて、ここで比較の対象として取り上げた上記『メキシコ語とカステイリア語の文法』の著者アロンソ・デ・モリナの生涯については、詳しいことは分かっていないが、幼くして両親と共にメキシコに渡り、その地でナワトル語を学んだものと思われる。彼はすでに、1524年には、メキシコに入ったフランシスコ会宣教師の通訳を勤めている。彼はその後、フランシスコ会に入り、その生涯を信仰と伝道とに捧げると共に、『カステイリア語・ナワトル語辞書＝ナワトル語・カステイリア語辞書』(1571年)をも編み、ヨーロッパ人のナワトル語研究の基礎を築くことにもなった^(註4)。

2. 『カステイリア語文法』と『メキシコ語とカステイリア語文法』の基本的枠組み。

2.1. ネブリハが彼の『カステイリア語文法』(以下 *Gramática* とする)にどのような枠組みを設定し、またそれにどのような内部構成を与えよう

としたかは、いうまでもなく、そこで与えられている諸定義や諸分類として具体化されている。彼はその文法書の冒頭で、文法が扱うべき領域を次のように規定している。

彼はまず、文法をクインティリアヌスにしたがい二つの部門に大別する。その一つは方法・理論の部門であり、ここでは文法技法の原理・規則が記述される。彼はこの領域にギリシア語では *Methódica*、ラテン語では *Doctrinal* という語を当てることができるといっている。もう一つは通時・実証の部門であり、これは当該言語の史的变化の解明と、その使用に当たって我々が規範として準拠すべき詩人・著述家を指定することが、その役割になる。ここには、ギリシア語では *Istórica*、ラテン語では *Declaratoria* なる語が当てられる、という (*Gramática*, pp. 117-118)。

続いてネブリハは、上記の方法・理論の部門を四部に下位区分し、その記述対象を以下のように設定している。その第一はギリシア語 *Orthographía* によって示される領域で、これは“正しく正確に書くことの学問”，第二はギリシア語 *Prosodia* の表す領域で、これは“強勢あるいはなお正確には声調についての記述”，第三はギリシア語 *Etimología* の表す領域で、これは“品詞の意味とその語形変化についての記述”，第四部はギリシア語 *Syntaxis* の表す領域で、これは“品詞間の接合と配列の順序”を記述対象とすると述べ、夫々の役割分担を示している(註5)。

ネブリハはまた、*Gramática* の序文にも述べているように、外国人がカステイリア語を学習することをも予想して、“ことばを異にする人々で学びたいと願う人々のためのカステイリア語入門の部”をも付け加えている。この章を編むにあたってネブリハは、クインティリアヌスの教えるところに従い、かつまたギリシア語文法とラテン語文法の基本的な枠組みを尊重した、ともいっている(註6)。

2.2. モリナの『メキシコ語とカステイリア語文法』の基本的枠組み。

モリナの文法書『メキシコ語・カステイリア語文法』(以下、*Arte* とする)の構成は実に単純である。

そこではまず本書出版のための手続きが遺漏なく終了していることを示す関係者の許可証と確認書が挙げられる。これは、ときのヌエバ・エスパニャ副王マルティン・エンリケス、同じくヌエバ・エスパニャ大司教区総

務管理官バルトロメ・デ・レデスマ神父、出版物検査官としてのメキシコ市聖ドミニコ修道院院長ドミンゴ・デ・ラ・アスンシオン神父と聖フランシスコ会のフワン・ホチェル神父の検閲確認、これらを受けての審査会首席フランシスコ・デ・リベラ神父の許可証、からなっている。それに続いて著者モリナの副王マルテイン・エンリケスに宛てた冒頭書簡が掲載され、その次に文法書の序文が置かれている^(註7)。

モリナがその目的とするナワトル語の記述はすでにこの序文から始まっている。彼はこの *Arte* を二部に分け、前半では *En la primera [parte] se tratará copiosa y claramente de todas las ocho partes dela oración que esta lengua tiene, conforme a la lengua latina y castellana.* 「ラテン語とカステイリア語にしたがいこの言語がもつ八品詞を広汎にしかも明瞭に扱い」(f.6)、後半ではナワトル語の“難解で微妙な有様を取り上げこれを解説する”といっている(f.6)。これ以上は文法書の構成そのものについては言及せずに、直ちに具体的な品詞論に移っている。

2.3. 文法下位部分の比較

2.3.1. 正書法

1) *Gramática*

ネブリハは、文字の発明、イスパニアに文字をもたらした人々のことに言及した後に、文字 (*letra*) と言語音 (*boz, voz*) との関係に触れて、*Las letras representan las bozes, y las bozes significan, como dize Aristóteles, los pensamientos que tenemos en el alma* 「文字は言語音を表し、また、言語音は、アリストテレスもいっているように、我々が心に抱いた思考を意味する」(p. 123) と述べ、二者の関係を規定している。

彼は引き続きラテン語の文字と発音との関係を記述する。彼は、カステイリア語がラテン語から派生した一言語であることを前提として、カステイリア語の文字とそれが表す音声の記述、その音声を正確に表記するために採るべき方法の提案、音韻変化とその結果をうけての表記上の調整、母音と子音の音韻的特徴の記述、などをおこない、最後にカステイリア語の正書法にかかわる一般原則を提案する。

ここにも表れているように、ネブリハにとっては、文法記述の基準となる「普遍言語」はラテン語であり、カステイリア語の音声と文字の説明に

あたっても、この普遍からの差として、カステイリア語の特徴が求められるのである。

その結果、ネブリハはカステイリア語には二十六種類の音声があると結論している(p. 128)。

2) *Arte*

モリナのこの部門に関する記述は非常に簡単である。

モリナも、ナワトル語にその音声を表記するラテン文字が存在しているかのように、(...) *esta lengua carece de seys letras, que son b.d.f.g.r.s.* 「この言語には六個の文字が欠けていて、それは、b, d, f, g, r, s である」(f. 5) と述べ、男性はカステイリア語の子音のような *v* の発音をもたないが、女性はカステイリア語的に子音 *v* の発音をすると、またナワトル語にはラテン語、カステイリア語のように5母音文字 *a, e, i, o, u* があるが、ナワトル語話者は *o* と *u* との区別を行わずに無差別に両者を使っていること、を挙げている。それに加えて、ナワトル語にはヘブライ語のシャーデ (*tsade*) にあたる文字があって、これは *t* と *s* か、*t* と *z* かで書き表し、*t* と *s* の発音をしなければならない (*Nimitztlaçotla, Nitza, Niuetzi* のような場合)、という。また、「*j / ll / n* + 母音」は、カステイリア語の場合のように、音節を構成しないことを指摘し、それ以外の正書法、強勢、文字の配列、品詞の配列に関する問題については、第二部で詳しく論考すると言って、序論を終えている(ff. 5-6)。

ここでは、モリナはナワトル語の音声をカステイリア語の文字で表記すること自体については、なんら特別な言及をしていない(註8)。

2.3.2. 韻律論と音節

1) *Gramática*

冒頭の四章で、音節の基本的な概念とカステイリア語の強勢についての解説がされる。この部門の記述の中心は「詩論」の展開にあるので、とくに冒頭の四章はそれへの導入部といえる。このように、詩論の論述を目指したためであろうか、カステイリア語強勢配置の規則は、近代語文法のそれほどには整理された形の説明にはなっていない(pp. 152-155)。

2) *Arte*

『モリナにはこの部門に対応する記述はない。

2.3.3. 語源論と語

1) *Gramática*

ここでネブリハは、カステイリア語の文法単位としての品詞の分類から初めて、カステイリア語にどのような種類の品詞を設定すべきかについて持論を述べ、個々の品詞の機能上の特徴に言及する。彼自身が「語源論」(etimología) といっているが、ここで扱われている事柄は、近代語文法でいえば、「品詞形態論」に属するものである。

ネブリハによればカステイリア語には十品詞があることになる。彼は、次のように、ギリシア語、ラテン語との違いを指摘している。

まず、ギリシア語には、名詞、代名詞、冠詞、動詞、分詞、前置詞、副詞、接続詞の八品詞があるとする。ついで、ラテン語はギリシア語と違って冠詞はないが、副詞から間投詞を独立させるので、やはり八品詞が設定できるとする。カステイリア語では、ギリシア語にはないヘルンデイオを加え、またギリシア語、ラテン語にもない不定分詞名詞を加えて、合計十品詞であるとしている(p. 175)^(註9)。

2) *Arte*

上述したように、モリナは *Arte* の内部構成の説明の部分で、「この文法書を二部に分け、その最初の部分で、ラテン語、カステイリア語に従い、このメキシコ語がもつ八品詞について、広般にしかも明確に取り扱うことにする」といっている。

ここでいう八品詞とは、Teutl「神」のような名詞、Nehuatl「私」のような代名詞、Nitetlaçotla「私は愛する」のような動詞、Axcan「今日・今」のような副詞、Yntetlaçotla「愛するところの」のような分詞、Yuan「...と...; もまた」のような接続詞、Pan「の中に; の上に」のような前置詞、Yyo「おお」のような間投詞、とである。

ここでは、モリナは上述のように、「ラテン語、カステイリア語に従い」といっているが、厳密には、ネブリハがラテン語について挙げた八品詞の区分に従っている、といわなければならない^(註10)。

2.3.4. 統語と品詞の語順

1) *Gramática*

ネブリハはこの部分では、文の構成要素として機能する動詞、名詞がそ

れぞれ他の品詞とどのような結び付き方をするかを論じている。しかし、その記述はごくかぎられた範囲に限られ、近代語文法で期待されるような水準にはとうてい至っていない。むしろ後半では「比喩」、「陰喩」といった意味論や文体論にかかわる現象を、詳しく論じている。

2) *Arte*

モリナの記述は、全体としてみれば、形態論が中心で、統語論的分析はむしろ語法に関する考察として、形態論に付随する形で随所に現れてくる。第二部では難解な名詞、動詞について解説するといっているが、この解説も形態と意味に関するものである。したがって、*Arte* には「統語論」としての独立した部門はない、といえるであろう。

2.3.5. 外国人のための学習書として

1) *Gramática*

ネブリハは先行する四部で記述してきたことを総合して、学習者が理解し習得しなければならない基本的な事柄を第五部としてまとめ示している。その意味では、すでに述べられた事柄が再度取り上げられることもあるが、これらはネブリハにとってみれば、カステイリア語学習・習得のための重要事項とみなされたと思われる。なお、ここでは名詞と動詞を中心として、その記述が進められる。

2) *Arte*

モリナがその *Arte* を編んだ目的は、まずは、イスパニア語話者—特に宣教師や伝道師—にナワトル語学習の便宜、手段を提供することにあつた。その意味では、彼の *Arte* はナワトル語の語構成法について、接頭要素、接尾要素、それらの付加から生じる音声変化に着目し、個々の場合を実に詳しく記述している。上記ネブリハの *Gramática* 第五部に該当する箇所を求めるとすれば、これは、*Arte* の第二部になるといえるだろうが、ここに取り上げられている名詞や動詞の語形変化は、それまで研究・学習の対象となった諸言語とは、大きく違った構造をもった一言語の存在を紹介することになったと思われる。したがって、第一部では、何度かモリナも述べているように、ラテン語、カステイリア語の枠組みに合わせて文法範疇を定め、品詞論的記述をしたが、第二部ではナワトル語の特徴をなすより特殊な現象を取り上げ、説明を加えることが目的となっているように

みえる。

3. Gramática と Arte 両者の共通点と相違点

3.1. 前項では二文法書の構成を中心として、いくつかの簡単な比較・対照をおこなった。また、そこではモリナの *Arte* 編纂に当たってはネブリハの『カステイリア語文法』が、それに加えて『ラテン語入門』がその下敷き、モデルとして活用されたことを推定して論述を進めてきた。これは、*Arte* の冒頭の記述などからも窺い知れることであり、たとえば、“ラテン語やカステイリア語におけるように” (*como en la [lengua] latina y castellana ; f.5*) とか、“この点においてはアントニオ・デ・レブリシャのラテン語文法をまねて” (*ymitando en esto a Antonio de Lebrixa en su arte de latín ; f.5v*)、のような記述が両者の関係を明示しているといえる。

しかしながら、ある言語の文法をまったく系統の異なるもう一つの言語の文法で整理しようとするのは、考えてみれば、実に乱暴きわまる発想である。とはいえ、実際にこの分析・整理の作業が行われ、系統の全く異なる言語の文法書が編まれている。そうすれば、とくに *Arte* の側にどのような不整合、矛盾点が現れてきているかということが問題となって浮かび上がってくる。

3.2. 品詞論の枠内での二者の異同

ラテン語文法の記述にも明らかなように、中世を過ぎて近代に至るまでいわゆる「文法」はその記述の中心を形態論に置いたと思われる。これはとくに文法の対象となった古典語が、基本的に総合語であり個々に相当複雑な屈折の体系をもっていたこと、にその主たる理由があるといえるだろう^(註11)。ネブリハも、カステイリア語の文法を編むにさいして、文法の下位区分を、上記のように、正書法、韻律論、語源論、統語論として挙げてはいるが、とくに第四部門の統語論は著者がその記述の立場を最も明確に表明できる部門であるにもかかわらず、近代語、現代語の「統語論」から期待しうる分析・規則化は皆無とっていいほどにひそやかである。

同じ記述の方法がモリナにもみえる。つまり、両者に共通する部門としては、形態論とくに品詞論の部分であるといえるので、以下で簡単に、

Gramática と *Arte* との間にどのような類似点、相違点があるかを求めてみたいと思う。

3.2.1. 名詞

1) *Gramática*

Nombre es una de las diez partes de la oración, que se declina por casos, sin tiempo, y significa cuerpo o cosa. Digo cuerpo, como *hombre*, *piedra*, *árbol*; digo cosa, como *dios*, *ánima*, *gramática*. Llámase nombre, porque por él se nombran las cosas, y así como de ‘onoma’ en griego, los latinos hizieron ‘nomen’, así de ‘nomen’ nos otros hizimos *nombre*. (p. 176)

2) *Arte*

Nombre, se dize aquel que significa alguna cosa spiritual, o corporal, e en esta lengua ningún nombre se varía ni declina por casos, así como la latina. Empero es de notar, que a algunos nombres que significan cosas animadas y biuas, así como. *oquichtli*. que quiere dezir varón, o macho de qualquier género. Y ay otras que significan cosas ynanimadas, así como. *tlatulli*. que quiere dezir. palabra, o palabras. Y los que significan cosas animadas y biuas, tienen singular y plural, los cuales tienen dos terminaciones, la una en el número singular y la otra en el plural. (ff. 6v-7)

この両者の比較から、ネブリハは名詞を文の構成要素として位置付け、その機能によって「名詞が格の曲用をもつこと、また動詞とは異なり時制をもたないこと、有形の人や物あるいは抽象概念を意味する語種である」と定義付けている。

これに対して、モリナは、名詞を有生名詞と無生名詞とに分け、これに続いて、「ナワトル語にはラテン語にみられるような曲用はない」、と述べている。続いてモリナは、ネブリハが相当のスペースを割いて論及しているその他の名詞についての文法的特徴には触れずに、すぐさま有生名詞にみられる数表示の形態について言及する。次に彼は、機能格として、名詞には単数形と複数形とにそれぞれ、主格、属格、与格、対格と奪格とがあ

るとして、この五種類の格に共通の語形として、単数形には Teutl「神」、複数形には Teteu があるといっている(f.7)。一方、ネブリハは、名詞を論じた計六章(2-7章)のうち第六章の最終部で、Los casos en el castellano son cinco「カステイリア語における格は五種類である」として、主格、属格、与格、対格と呼格とを挙げている(p. 189)。ラテン語に依拠して、あえて「格」に言及した点では共通するものの、奪格と呼格の扱いでは二者に差がみられるところなど、は面白い結果となっている。ネブリハにもモリナにもラテン語的な「格」の呪縛が重くのしかかっている、モリナが“名詞にはラテン語のような格の変化はない”(ningún nombre se varía ni declina por casos, así como la latina; f.7)といった記述と、上記のような名詞 Teutl / Teteu を例としての格の表示とはまったく矛盾する、といわねばならなくなってしまう。

このようにして二者を比較してみると、モリナの名詞についての定義は、その大綱においては、ネブリハが示したものに一致しているといえるであろう。

その他、特にモリナの記述を中心として、興味ある点をいくつか挙げてみよう。

A) ナワトル語は呼格だけは形態的に特別な語尾 E をもち、その他の格から区別されている(主格 Oquichitli「男性」/呼格 Oquichitle)(f.9)。また、ネブリハとは逆に、モリナは奪格を格変化のなかに含めている(註12)。

B) モリナは、とくにラテン語、カステイリア語の「所有の属格」の概念を基にして、所有形容詞の機能に言及する。Nota 'mi padre', Mota 'tu padre', Yta 'padre de aquel', Yta Juan 'padre de Juan', (...), Ynta 'padre de aquellos', Teta 'padre de algunos o padre absolutamente', のような場合であり、ここでは一人称、二人称では「主格」になり、三人称では「属格」になるという。この「属格」とは“y + 名詞 + 所有者”となる「所有表示の形式」に基ずいた解釈なのであろう(f.10)。

C) 語の派生については、示小辞と示大辞の存在に触れて、その表意作用をも記述している。たとえば、接尾辞 Ontli, On については, significan humillación, menosprecio, abatimiento, o denuesto y algunas vezes humildad「これらの接尾辞は、見下し、軽蔑、軽んじ、あるいは軽視を意味し、下賤さを意味することもある」と述べて、Ciuatontli 'mugerzilla'

「小娘」をその例としている(f. 16)。示大辞についても、たとえば、接尾辞 Pul を挙げ、Auianipul ‘ramera o mala muger digna de menosprecio’ 「売春婦すなわち軽蔑に値する邪な女性」によってその意味を説明している(f. 16v)。

D) 比較級、最上級についても言及するが、ここではそれぞれの形態的な特徴よりも、この意味を表現するための文構造が挙げられているといえるだろう。たとえば、Vn pedro qualli, çan occenca qualli in Juan ‘Pedro es bueno, empero Juan es mejor y más bueno’ 「ペドロは善良だが、ホアンはよりすぐれまたより善良である」のような文がみられる(f. 17v)。

E) 続いてモリナは、ナワトル語の名詞には性 (género 「文法性」) はないが、名詞によっては、Oquichtli 「男性あるいは雄」のように男性 (género masculino) の意味をもつもの、Ciuatl 「女性あるいは雌」のように女性 (género femenino) の意味をもつものもあり、その他、Tlacatl 「男、女あるいは人」のように男性・女性の二つにまたがるもの、それに Tetl 「石」のように性別 (sexo) をもたないものもある、といている。これは名詞の第二次範疇としての文法性ではなく、一部の名詞の語彙的意味から得られる性別にしかすぎない(f. 18v)。

しかし、カステイリア語やラテン語文法の枠組みを中心にしてナワトル語を記述しようとするモリナは、名詞の「性」にこだわり、Quauhtli ‘aguila’ 「鷲」のように、その性を明瞭に示さない名詞があることを指摘している。あわせて、ナワトル語話者はもしこれらの動物の雌雄を区別したいときには、Oquichmaçatl ‘ciervo’ 「雄鹿」、Ciuamaçatl ‘cierva’ 「雌鹿」、Chichi ‘perro’ 「雄犬」、Ciuatlchichi ‘perra’ 「雌犬」のような形式を用いる、ともいっている(f. 19)。

F) モリナはまた、語彙的意味からその「性」が明らかにならない名詞に「性」を与えるとすれば、この問題は、当該の意味をもつラテン語あるいはカステイリア語の名詞の「文法性」を与えることで解決できる、といている。この論法によって、ナワトル語 Tetl 「石」は、カステイリア語の Piedra 「石」の性に従えば「女性」、Guijarro 「小石」に従えば「男性」の「性」を与えられるというが、ここには名詞には文法性があるべきもの、とするモリナの固定観念が色濃くみえている(f. 18v)。

3.2.2. 形容詞

モリナは形容詞を独立した品詞としての扱いをせず、この語種は「ラテン語に準拠していうとすればどの文法性としても扱える」([los nombres adjetivos] si se refieren a la lengua latina se pueden decir que son de cualquier género) ということとどまり、二つの形容詞 Yectli「よい」、Qualli「よい」に対して、ラテン語の Bonus, Bona, Bonum を挙げその意味を説明している(f. 19)。形容詞をこのように名詞に依存する第二範疇として扱い、これに三種類の形態的特徴を求めようとするのは、まさしくネブリハの記述の方法を踏襲したものといえるであろう(*Gramática*, pp. 177-78)。

3.2.3. 代名詞

1) *Gramática*

Pronombre es una de las diez partes de la oración, la cual se declina por casos, y tiene personas determinadas. E llamase pronombre, por que se pone en lugar de nombre proprio: por que tanto vale *io* como *Antonio*, *tú* como *Hernando*. (p. 192)

2) *Arte*

Pronombre, es aquel que se pone en lugar del nombre proprio de cualquier persona o cosa. Y en esta lengua ay diuersos y diferentes géneros de pronombres. (f. 21)

この代名詞についての両者の定義から、モリナはネブリハの説を踏襲したということが明らかとなる。

3.2.4. 冠詞

Gramática

(...) se llamaron aquellos artículos, que añadimos al nombre para demostrar de qué género es. (p. 194)

ネブリハはこのように冠詞について、現代語文法にもみられるような斬新な定義を下している。彼は定冠詞、不定冠詞の区分は設けていないが、

Un が数詞ではなく Cierto 「ある種の」の意味をもつことがあるといつて、数詞とは違うその微妙な働きについてもふれている(p. 191)^(註13)。

これに対して、Arte では「冠詞」についての言及はない。

3.2.5. 前置詞

1) Gramática

Preposición es una de las diez partes de la oración, la cual se pone delante de las otras, por aiuntamiento, o por composición. (...). I llama se preposición, por que siempre se antepone a las otras partes de la oración. (p. 207)

2) Arte

Preposición se dize ser aquella que se antepone a las otras partes, las quales son muchas, como aquí se ponen, Pa 'en', Ex. Ypan yn Euangelio 'en el Euangelio'. (f. 74)

ネブリハは Io vo a casa 「私は家に帰る」の a だけでなしに、Io apruebo tus obras 「私は君の作品を承認する」にみられる apruebo の a- をも、前置詞として扱っている(p. 207)。

これに対してモリナはナワトル語には、前置詞に加えて後置詞があることを指摘する。また、後置詞は名詞と接合するときに、名詞の語末音に修正を加えたりこれを脱落させたりする作用があるとして、この後置詞の付加によって生じる、複雑な音声変化の規則をも挙げている。たとえば、Ilhuicatl 「空」は Tl を外してから C 「の中に」を加えて、Ilhuicac 「空に」とする、のような場合である。このような多くの接尾辞の付加による文法関係の表示はナワトル語の特徴でもあり、モリナはここで関連する現象を積極的に数え出している(ff. 75-76)。

3.2.6. 接続詞

1) Gramática

Conjunción es una de las diez partes de la oración, la cual aiunta y ordena alguna sentencia ...; y llama se conjunción, porque aiunta entre sí diversas partes de la oración. (p. 211)

2) *Arte*

Conjunción se dize, la que ayunta y ordena la sentencia. las quales son diferentes vnas de otras. Porque algunas son copulativas, así como Yuan, Yequene, No 'y también; y así mesmo' (f. 80v)

ネブリハはその意味に基づき、「連結・離接・理由・結果・引継ぎ」の五種類に接続詞を分類しているが、これでは接続詞の意味を網羅したことにはならない^(註14)。

他方、モリナはその意味に基づく分類を行うが、この部分ではネブリハよりも詳細で、そこに欠落していた意味機能、「目的・譲歩・条件」などを追加している^(註15)。

3.2.7. 副詞

1) *Gramática*

Adverbio es una de las diez partes de la oración, la cual, añadida al verbo, hinche, o mengua, o muda la significación de aquél (...). I llama se adverbio, por que común mente se junta y arrima al verbo. (p. 209)

2) *Arte*

Aduerbio quiere dezir, quasi añadidura, o cosa añadida al verbo. Por quanto determina la significación del dicho verbo, como aparece en los exemplos que se siguen. (f. 71)

ネブリハは、形容詞が名詞を性質・状態において限定するのと同じ働きを、副詞は動詞に対して行うと規定して、その意味を基準とし、「場所・時・否定・肯定・疑惑・提示・願望・順序・質問・連結・分離・請願」などに下位区分を設けている^(註16)。

モリナの副詞に関する定義はネブリハのものと変わらない。また、意味に準拠した分類も、部分的にはネブリハのそれを受け継いでいる。しかしながら、Tlaque, Tlaocque, Tlaocqueuatl, Tlaquele, Tlayecuele, Mayecuel. 'ea, ea, a ello, a ello, sus a ello', のように「叱責・命令・励まし・挑発・元気付け」のために使われる語種も、副詞として分類されている。しかし、これはむしろ間投詞として扱うべきであろうと思われる^(註17)。

3.2.8. 間投詞

1) *Gramática*

Assí, que será interjección una de las significaciones del adverbio, la cual significa alguna pasión del ánima, con voz indeterminada (p.210)

2) *Arte*

Interjección se dize. La qual significa el affecto y desseo del alma, por alguna voz confusa. La qual no tiene propria significación como Yyo, Yo, 'o'. Exem. Yyotetlaoculianie 'O miseicordioso' (f. 81v)

このように、ネブリハは間投詞を独立した品詞には扱わず、副詞の機能の一つとした。これに対してモリナは、間投詞を独立させ、その表意作用に基づきそれを、「同情・恐れ・驚き・軽蔑・叱責・喜び・禁止…」に分類している^(註18)。

3.3. 動詞の場合

3.3.1.

1) *Gramática*

ネブリハは第三部と第五部のかなりの部分を動詞の特徴の説明に割いている。そのうち第三部では、品詞論における動詞の位置、そこから派生する文法単位など、理論的な考察が中心になる。この考察を受けて、第五部では動詞の機能を具体的に敷衍している。この第五部は、序章をも加えて全十二章から成るが、そのうち第四章以下は動詞に関連した記述に当てられている。動詞の活用表、時制や叙法についての第二次・第三次範疇などは、すべてここで取り扱われている。

ネブリハは動詞の形態上の特徴を八種類とした。Los accidentes del verbo son ocho: especie, figura, género, modo, tiempo, número, persona, conjugación 「動詞の形態変化は八種類である。即ち、種類、形状、種別、叙法、時制、数、人称、活用とである」(p. 196)。これらの区分をネブリハの説にしたがって規定すると次のようになる。

A) 種類

種類 (especie) とは、原基動詞 (verbo primogénito) と派生動詞 (verbo derivado) とを区別するための基準となる特性をいう (amar / armar

← arma)。また、派生動詞は、示大動詞 (verbo aumentativo), 示小動詞 (verbo diminutivo), 名詞派生動詞 (verbo denominativo), 副詞派生動詞 (verbo adverbial) に下位区分されるが、前の二者は意味的な特徴に基づく分類、後の二者は品詞論的基準からの分類といえるであろう (p. 196)。

B) 形状

形状 (figura) とは、単純動詞と合成動詞とを区分するための基準をいう (amar / desamar) (p. 197)。

C) 種別

種別 (género) とは、他動詞 (verbo activo) から絶対動詞 (verbo absoluto; 「自動詞」の意味で用いている) を区分するための基準をいう (Io amo a Dios 「私は神を愛する」/ lo vivo 「私は生きている」) (p. 197)。

D) 叙法

叙法 (modo) とは、クインティリアヌスの説を引用して、動詞における意味の現れ方を区別するための基準のこと、と定義し、次の五種類を設定している。即ち、直説法 (modo indicativo), 命令法 (modo imperativo), 願望法 (modo optativo), 接続法 (modo subjuntivo), 不定法 (modo infinitivo), とである。この叙法に設けられた下位区分は、「願望法とは物事を欲し願うために使う叙法で、たとえば, ¡O, si amase a Dios! - 願わくば私が神を愛することができるように」, 「接続法とは動詞をもう一つの動詞に繋ぎ合わせるために使う叙法で, Si tú amases a Dios, El te amaría - もしおまえが神を愛するのなら, 神様はおまえを愛されることであろうが」, という二つの説明からも明らかなように、その分類の基準は構造的なものと意味的なものとが混同されてしまっている (p. 197)。

E) 時制

ネブリハは「時制」については定義を下してはいない。彼は、現在 (presente), 未完結過去 (pasado no acabado), 完結過去 (pasado acabado), 完結大過去 (pasado más que acabado), 未来 (venidero) の五区分を設定し、伝統的な文法用語 pretérito を用いず、個々の時制の働きの特徴付けができるような平易な名称を使っている。これはラテン語文法で伝統的に維持されてきた、時制変化を示す諸形態の中に「時の指示」と「相の指示」という二つの機能を区別すべきものとする考え方、の反映ともいえるであろう。たとえばウッロのような文法学者は、時制形式の機能分析

においては、相の区分、つまり完結対未完結の区分が、最も重要な特徴をなすと考えていたようである^(註19)。

この基本的な時制の設定に当たって、ネブリハは動詞の機能のうち「相」を重要視している。彼は「時」と「相」という二つの概念によって、出来事を時間軸にそって配置するが、ここでは彼は「aver + 過去分詞」を複合時制として統一的に捉えず、この形式をとときには助動詞の「時」で、またときには過去分詞の表す「時」で解釈したりする。その結果、Amé, E amado, Ove amado の三種の時制形式が同一範疇 - 完結過去 (passado acabado) - の枠内に入る、というような不合理な解釈を生むことにもなってしまった。

また、不定法では「時」と「相」とを混同して、Amar を現在に、Aver amado を過去に、Aver de amar を未来に分類している。そうならば、ヘルンデイオにも同じ枠組みを期待してしかるべきであるが、ここでは不定法の場合のような分類はみられない^(註20)。

F) 数と人称

数 (número) と人称 (persona) とは、単数と複数とを区別する基準 (io amo / nos amamos) と、1 人称、2 人称、3 人称とを区別する基準 (io amo / tú amas / alguno ama) とをいう。

G) 活用

ネブリハは不定詞の示す形態的特徴によって、規則活用に三種類の異なるタイプを設定する (amar, enseñar / leer, correr / oír, bivar)。

H) 動詞迂言形式

ネブリハはこの項目の下に、「ser + 過去分詞」の受動態の形式、再帰代名詞 Se の介在する非人称表現や受動表現、「aver + 過去分詞」による複合時制を扱っている。それに加えて、ロマンス語の特徴の一つとしてカステイリア語にもみられる直説法未来、過去未来にも言及し、El futuro dize por rodeo del infinitivo y del presente deste verbo, E, as, diciendo io amaré, tú amarás, que vale tanto como io e de amar, tú as de amar 「未来は不定詞と動詞 E, as の組み合わせによって表され、io amaré, tú amarás というが、これは io e de amar, tú as de amar というのと同じ価値をもつ」(p. 200), と説明している。このような分析を上記の二時制形式について行ったのはネブリハが最初であるといわれ

る(註21)。

I) 態

態 (Voz) については、動詞活用表に依拠して、カステイリア語には能動態しかないという。一方では、非人称動詞はそれぞれ動詞の三人称複数形によって、あるいはまた、三人称単数形に相互・再帰を意味する代名詞 *Se* を付加して表すことが出来るという。

なお受動態は、動詞 *So, eres* と受動過去分詞 (*participio del tiempo pasado de la passiva*) との組み合わせで表すと同時に、能動態動詞三人称に相互・再帰の代名詞 *Se* を加えた形で表すことも出来る、といっている。

J) ヘルンデイオ

ネブリハはヘルンデイオを動詞の下位範疇ではなく、独立の品詞として扱っている。これは *Leiendo el Virgilio aprovecho* 「ヴェルギリウスを読んでいると私は得るものが大きい」の *Leiendo...* が *En leer...* と書き換えられるという、構造上の置き換えに依っている (p. 201)。

K) 分詞

分詞 (*Participio*) もヘルンデイオと同様、独立した品詞として扱われている。この分詞には、現在分詞、過去分詞、未来分詞の三区分を設けているが、ネブリハ自身、現在分詞と未来分詞とはラテン語的な区分設定であり、カステイリア語にはなじまない、といっている (p. 204)。なお、彼の分類に依れば、現在分詞とは、*Bastante, sirviente* のような形を、未来分詞とは *Passadero, venidero* のような形に対する名称である (p. 203)。

L) 不定分詞名詞

この項目はネブリハが、複合時制の構成要素の一部として現れる「過去分詞」を、形態・機能的に規定するために導入したものである。彼は、*osemos la [= esta parte de la oración] llamar nombre participial infinito: nombre, por que significa sustancia y no tiene tiempos; participial, porque es semejante al participio del tiempo pasado; infinito, porque no tiene géneros, ni números, ni casos, ni personas determinadas* 「我々はあえてこの品詞を不定分詞名詞と呼ぶこととしよう。名詞というのは、これが実質を意味しかつまた時をもたないからである。分詞というのは、これが過去時の分詞に類似しているからである。不定と

いうのは、これが性も、数も、格も、特定の人称をももたないからである」(p. 205), と述べて、この項目を独立したものとして扱う理由を示している。

なおカステイリア語では、「aver + 過去分詞」の組み合わせによる複合時制形式で、過去分詞が中性形に固定化し始めたのが15世紀末からであり、この事実を観察したネブリハが、上記の迂言形式に現れる無変化の過去分詞を特殊な項目として独立させたとすれば、ここでいう「不定分詞名詞」は、ネブリハの卓見というべきであろう。

3.3.2.

2) *Arte*

すでに部分的にみたように、モリナはナワトル語分析・記述のための枠組み作りでは、叙法、時制など、第二次範疇やその下位区分の設定と配置の順序まで、おおむねネブリハに一致している、といっている。つまり、その記述からは、ネブリハの示した文法上の概念規定を所与のものとして前提しようとする姿勢が、明瞭に感じ取れる。しかしながら、カステイリア語、ラテン語とは異質なナワトル語の現実を前にして、既設の基準が当てはまらなないと認めたときには、思い切った転換をみせ、彼独自の立場から分析をおこなうこともいとわなない。多くの場合には、ネブリハの立てた基準でそれがナワトル語の説明・記述に適用可能と判断した場合には、そこを出発点として直ちに具体的な問題の分析・記述に入る、という手法がとられている。

たとえば、動詞については簡単でしかも一般的な定義を挙げただけで(f.26v), 直ちにネブリハの示した枠組みに従い、ナワトル語の言語事実を提示してゆく。動詞についての定義は以下のように実に簡単で、それに続いて動詞活用表が挙げられている。

Llámase verbo, el que se conjuga y tiene modos y tiempos, el qual significa la operación de alguna cosa, assí como *Nitetlaçotla* 'yo amo', o significa passón, así como *Nitlaçotlalo* 'yo soy amado'. O es neutro, el qual no significa operación ni pasión, así como *Ninemi* 'yo vivo', *Nica* 'yo soy o estoy' 「動詞と呼ばれるものは活用をし、また叙法と時制とをもつもので、これは *Nitetlaçotla* '私は愛する' のように何かを行うことを意味する。あるいは *Nitlaçotlalo* '私は愛される' のように受け身

を意味する。あるいは中立的で, Ninemi ‘私は生きる’ や Nica ‘私は...である’ のように, 動作をも受け身をも意味しないもある」(f. 26v)。

モリナは次のような, 動詞幹 Tetlaçotla ‘愛する」を用いて, 可能なかぎり広範囲に動詞活用形を示している。その一部をみよう。

A) 直説法 能動態

現在 (Tempore presenti. En el tiempo presente) (f. 26v)

	単数	複数
I	nitetlaçotla	titetlaçotla
II	titetlaçotla	antetlaçotla
III	tetlaçotla	tetlaçotla

不完了過去 (Pretérito imperfecto. En el tiempo pasado y no cumplido) (f. 26v)

I	nitetlaçotlaya	titetlaçotlaya
II	titetlaçotlaya	antetlaçotlaya
III	tetlaçotlaya	tetlaçotlaya

完了過去 (Pretérito perfecto. En el tiempo pasado y ya cumplido) (f. 27)

I	onitetlaçotlac	otitetlaçotlaque
II	otitetlaçotlac	oantetlaçotlaque
III	otetlaçotlac	otetlaçotlaque

過去完了 (Pretérito plusquamperfecto. En el tiempo pasado y más que cumplido) (f. 27)

I	onitetlaçotlaca	otitetlaçotlaca
II	otitetlaçotlaca	oantetlaçotlaca
III	otetlaçotlaca	otetlaçotlaca

未来 (Futuro imperfecto, en el tiempo que está por venir y no cumplido) (f. 27v)

I	nitetlaçotlaz	titetlaçotlazque
II	titetlaçotlaz	antetlaçotlazque
III	tetlaçotlaz	tetlaçotlazque

未来完了 (Futuro perfecto, en el tiempo venidero, ya cumplido) (f. 27v)

I	onitetlaçotlac	otitetlaçotlaque
---	----------------	------------------

II	otitetlaçotlac	oantetlaçotlaque
III	otetlaçotlac	otetlaçotlaque

この活用形は上の完了過去のそれと同じである。これはモリナも指摘している事実であるが、ここでは、次のような第二形をも含めて、合計四種の活用形が挙げられている。

I	onontetlaçotlac	otontetlaçotlaque
II	otontetlaçotlac	oamontetlaçotlaque
III	oontetlaçotlac	oontetlaçotlaque

B) 命令法

現在 (Tempore presenti, en el tiempo presente) (f. 28)

	単数	複数
I	manitetlaçotla	matitetlaçotlacan
II	maxitetlaçotla	maxitetlaçotlacan
III	matetlaçotla	matetlaçotlacan

この命令法でも現在以外に、未来、否定命令現在の区分が設けられ、それぞれに該当する活用形が挙げられている。しかしながら、肯定命令現在と否定命令現在は、単数形では共通の活用形をもつので、ここにも活用表簡略化の可能性があると見えるだろう。

C) 願望法

現在 (Tempore presenti. En el tiempo presente) (f. 28v)

	単数	複数
I	manitetlaçotla	matitetlaçotlacan
II	maxitetlaçotla	maxitetlaçotlacan
III	matetlaçotla	matetlaçotlacan

モリナは何の言及もしていないが、この活用形は肯定命令法現在と同じである。なお、カステイリア語の対応形としては、O si yo amasse, o si tú amasses... を挙げている。ここにも、活用表簡略化の可能性を指摘し

うる。

完了過去, 不完了過去, 過去完了の枠のもとに, Manitetlaçotlani, Maxitetlaçotlani... となるこの時制に該当する活用形式を挙げ, カステイリア語の対応形としては, O si yo amara, aya, oviera y oviesse amado を挙げているが, このうち, O si aya amado だけはネブリハの活用表には現れてこない(*Gramática*, p. 253)。

未来については, Manitetlaçotlaz, Matitetlacotlaz... のようなこの時制に該当する活用形式を挙げ, カステイリア語の対応形としては, Oxalá yo ame..., を挙げている (f. 29)。

D) 接続法

現在 (Tempore presenti. En el tiempo presente) (f. 29)

単数			
I	intlanitetlaçotla	/	iniquactitetlaçotla
II	intlaxitetlaçotla	/	iniquactitetlaçotla
III	intlatetlaçotla	/	iniquactetlaçotla
複数			
I	intlatitetlaçotlacan	/	iniquactitetlaçotla
II	intlaxitetlaçotlacan	/	iniquacantetlaçotla
III	intlatetlaçotlacan	/	iniquactetlaçotla

ここには二つのタイプの活用形が挙げられている。モリナによれば, 前者 Intla- 型は, si yo amare, si tú amares... に, 後者 Iniquac- 型は como yo amo(原典は amo だが, ame となるべきであろう), quando yo amo, como tú ames, quando tú amas... に対応するという。

不完了過去, 完了過去, 過去完了 (Pretérito imperfecto, perfecto y plusquamperfecto) (f. 29v)

この部分では, Intlanitetlaçotlani, ... のような新しい活用形を挙げて, カステイリア語での対応形としては, Si yo amara, amaría, amase, aya, ouiera y ouiese amado を挙げている。

不完了未来 (Futuro imperfecto. En el tiempo que está por venir y no cumplido) (f. 30)

Intlanitetlaçotlaz, Intlatitetlaçotlaz... のような活用形を挙げ, カステイリア語の対応形としては, Si yo amare, y ouiere amado; si tú amares, y ouieres amado を挙げている。

完了未来 (Futuro perfecto. En el tiempo venidero ya cumplido)(f.30)

Intlaonitetlaçotlac, Intlaotitetlaçotlac... のような活用形を挙げ, カステイリア語の対応形として, Si yo amare, ouiere y auré amado; si tú amares, ouieres amado, y aurás amado を挙げている。

E) 不定法

直説法 現在 (Tempore presenti. En el tiempo presente)(f. 31)

不定法については, El infinitivo se haze de la tercera persona del futuro imperfecto del indicativo modo y el verbo Nequi en la manera que se sigue. 「不定法は直説法不完了未来の三人称と動詞 Nequi とから, 次のように作られる」(f.30v), といって, 以下のような活用形を挙げている。

	単数形	複数形
I	nitetlaçotlaznequi	titetlaçotlaznequi
II	titetlaçotlaznequi	antetlaçotlaznequi
III	tetlaçotlaznequi	tetlaçotlaznequi

従って, これに該当するカステイリア語の形は, yo quiero amar, tú quieres amar... となる。

不完了過去 (Pretérito imperfecto. En el tiempo pasado y no cumplido) (f. 31)

nitetlaçotlaznequia, ... (yo quería o quisiera amar, ...)

完了過去 (Pretérito perfecto. En el tiempo pasado ya cumplido) (f. 31v)

onitetlaçotlaznec, ... (yo quise amar, ...)

過去完了 (Pretérito plusquamperfecto. En el tiempo pasado y más que cumplido) (f. 31v)

onitetlaçotlaznecca ..., (yo quisiera auer amado, ...)

不完了未来 (Futuro imperfecto. En el tiempo venidero y no cumplido) (f. 32)

nitetlaçotlaznequiz ..., (yo querré amar, ...)

完了未来 (El futuro perfecto. Es en todo semejante al pretérito perfecto, quitada la o.) (f. 32v)

nitetlaçotlaznec... (quise auer amado)

F) 活用表は引き続いて、受動態に移り再び Nitlaçotlalo, ‘yo soy amado’, ... となる活用形が挙げられている。この Tetlaçotla ‘ama’ による活用形は f.39 までに及んでいる。次には、動詞 Nica ‘yo soy o estoy’ 即ち、カステイリア語 Ser, Estar に対応する動詞の活用表が、ヘルンデイオと現在分詞についての一般的な記述をも含めて、f.71 まで続いている。それに引き続き、副詞(f.71), 前置詞(f.74), 接続詞(f.80v), 間投詞(f.81v) を扱い、第一部は f.82 で終わっている。このようにみると、第一部はその大部分が動詞の活用表に割り当てられていることが分かる。

3.4. 動詞の記述についての全般的考察

これまでモリナがナワトル語についておこなった叙法、時制の分類、その定義付けとそれに関連する説明、活用形配置の順序は、ネブリハが「カステイリア語文法」で示したものとほぼ完全に一致している。以下に、いくつか具体的な点をあげてみよう。

3.4.1. 叙法の面では、直説法(f.26v ; demostrar), 命令法(f.28 ; mandar), 願望法(f.28v ; desear), 接続法(f.29v ; ayuntar), 不定法(f.30v ; en la indeterminada manera)の五種類の叙法が立てられ、それぞれに挙げた動詞や表現によって個々の叙法の特徴が示されている。ネブリハはギリシア語文法に倣って「願望法」(optativo) をカステイリア語文法にも取り入れ

た。すでにラテン語でもその形態的特徴を失い、接続法に組み込まれていたこの意味範疇を、ここで独立・再生させようとしたと思われる。しかし、勿論のこと、この意味範疇はすでにカステイリア語でも接続法の特徴的な意味の一部と見做されていたので、ネブリハは、接続法の活用形を再度「願望法」の活用形としても充当しなければならなかった。このため、*Gramática* の動詞活用表は、同一の形態が異なる叙法・時制に繰り返して適用される結果、必要以上に複雑化し、ふくれあがってしまっている。

モリナはこのネブリハの叙法区分を忠実に継承した。その結果ナワトル語においては、命令法現在肯定形と願望法現在とが共通の同じ活用形をもつ、という事実を無視することにもなっている。命令法現在と願望法現在の表意作用の重なり、また願望法と接続法との機能的重なりを考慮すれば、この部分での活用表をもっと簡略化する可能性があった、といえるであろう。同じくネブリハを忠実に継承した結果、ナワトル語の願望法過去の *Manitetlaçotlani* はカステイリア語では、*O si yo amara, aya, ouiera y ouiese amado* の四形式に対応するという、機械的に、ネブリハを引き写しにした説明を下すことにもなっている。しかしこのカステイリア語の四形式は、表意作用において差があることを指摘しておきたい。ただし、ネブリハは、直説法で完了過去の枠の中には、*Amé, e amado, oue amado* の三種の異質の形式が含まれるとしたが、願望法にもこの考え方を延長したとすれば、願望法過去に対してもそれ以外に統一的な説明の方法がなかった、ということになるのかもしれない。

3.4.2. 叙法設定の面でネブリハは、不定詞を不定法として独立させた。

「叙法」である以上はその他の叙法の場合との対応から、時制をも設定して、*Amar / Aver amado / Aver de amar* を、それぞれ「不定法現在・過去・未来」としたのも、当然であろう。

モリナは不定詞の扱いでもネブリハに従った。彼は動詞 *Nequi* ‘querer’ と一般の動詞との組み合わせを不定法 (*infinitivo modo*)(f.30v) と規定し、*Nequi* の叙法・時制を不定詞のものとしても指定している。この点では、モリナのいう不定法、たとえば *Nitetlaçotlaznequi* ‘yo quiero amar’ は、本質的にはネブリハのいうものとは違っていて、「不定詞」というよりは、むしろ「助動詞 *Nequi* ‘querer’ と不定詞 *Tetlaçotlaz* ‘amar’ の迂言形式」

と規定すべきであろうと思われる。

モリナはヘルンデイオと分詞の扱いの面でもネブリハと違っている(f. 61)。モリナはこれら二項目についても、不定詞とまったく同じ基準で整理を行うので、ここには、叙法も時制も存在するということになる。たとえば、Nitetlaçotlatiuh ‘yo voy amando’ は動詞 Auh ‘ir’ の変化の可能性のすべてにわたって叙法・時制をとりうる、ということである。不定詞の場合とまったく同じ規則化の方法といえる(ff. 61-62)。

3.4.3. 時制の名称についてはネブリハは, Presente 「現在」, Passado no acabado 「非完結過去」, Passado acabado 「完結過去」, Passado más que acabado 「大完結過去」, Venidero 「未来」 だけを使っている(p.197)。

これに対してモリナはラテン語をも使って次のような言い方をしている。Tempore presenti. En el tiempo presente / Préterito imperfecto. En el tiempo pasado no cumplido / Pretérito perfecto. En el tiempo pasado ya cumplido / Pretérito plusquamperfecto. En el tiempo pasado y más que cumplido / Futuro imperfecto. En el tiempo que está por venir y no cumplido という名称であるが、両者の比較では、ネブリハのほうがより平易な用語を使っているといえるだろう。

3.4.4. モリナはネブリハが単純形だけを示して複合形を出していない直説法未来で、完了未来 (Futuro perfecto. En el tiempo venidero ya cumplido)(f.27v) をも挙げている。このように、モリナには、ネブリハの活用表の欠落部分を積極的に補おうとする姿勢をも窺い知ることができる (Nitetlaçotlaz ‘yo amaré’ / Onitetlaçotlac ‘yo auré amado’)(f.27v)。また、上述したように、この直説法の未来完了形は、形態的には、完了過去のそれと同じ、という事実にも注目する必要がある。これもカステイリア語、ラテン語文法の枠組みを優先させた結果生じたむだの一つ、といってもいいかもしれない。

3.4.5. 動詞活用 of 基底としての不定詞

カステイリア語文法、ラテン語文法では、不定詞が動詞活用の基本形として位置付けられ、この不定詞から出発してそれぞれの活用形の導き方が

説明される。しかるに、モリナは、積極的には、伝統的な方法で不定詞を形式化しようとは考えなかったようである^(註22)。

モリナは、上述したように、「不定詞は直説法不完了未来の三人称単数形と... とから導かれる」(f.30v) といっているが、これは「叙法」の一つとしての「不定法」であり、形態上の単位としてのものではない。しかし、カステイリア語、ラテン語文法的な動詞基本形を設定できるという意識があったことは、次の記述からも読み取れるであろう。Es aquí de notar que comúnmente según la costumbre de los hebreos, en todos los tiempos y modos se forman las otras personas de la tercera como de *Tetlaçotla* se dize Nitetlaçotla “yo amo”, Titetlaçotla “tú amas”, Y en el plural, Titetlaçotla “nosotros amamos”, Antetlaçotla “vosotros amays” 「ここで注意すべきは、一般にヘブライ人の習慣に従って、すべての時制と叙法においては三人称からその他の人称の活用形が作られることであり、たとえば、*Tetlaçotla* から Nitetlaçotla “yo amo”, Titetlaçotla “tú amas” が、複数では、Titetlaçotla “nosotros amamos”, Antetlaçotla “vosotros amays” が、作られるのである」(f.51v)。しかしながら、これ以下の記述をみると、モリナは個々の叙法・時制について三人称単数形を指定しているものの、我々がカステイリア語文法でいうような、厳密な意味での「不定詞」を積極的に枠付けしようとする意図はなかったようである。

3.4.6. 能動態と受動態の形式

ネブリハは、ラテン語文法とはちがって、カステイリア語には活用形としては能動態しかなく、受動態は、*So, eres* と受動過去分詞とによって表される”(p. 199) と、いっている。

モリナはナワトル語にある受動態の活用形を幅広く示している(Nitlaçotlalo ‘yo soy amado’... ; f.32v)。なおこの受動態の定義としては、「動詞は‘何事かをしかけること’と‘しかけられること’とを意味する」と規定し(f. 26v), そのうち、後者の意味関係に適用される活用形である、と説明している。

3.4.7. 非人称動詞

ネブリハは非人称動詞 (verbo impersonal) として、一つは三人称複数形による場合と、もう一つは代名詞 *Se* を三人称単数形に付加して相互・再帰の意味を形成する場合、の二者を挙げている (*corren, corrian / córrese, corriase*)(p. 199)。

モリナはこの非人称動詞の概念をそのままに受け入れて、受動態の三人称単数がこれに当たるとし、その特徴となる接頭辞は *Te* か *Ne* かであるといっている (*Tetlaçotlalo* ‘*todos aman*’ 「みなの人愛する」; *Netlaçotlalo* ‘*todos se aman*’ 「みなの人愛し合う」か ‘*los vnos a los otros se tienen amor*’ 「人々はお互いに愛し合う」)(f.38v)。なおモリナはこの二種の接頭辞の表意作用の差にふれて、*Te* は「動作がなにか対象に向けられること」を意味し (*Temachtilo* ‘*todos enseñan*’ 「みなの人教える」), *Ne* は「動作が受け取られること」を意味する (*Nemachtilo* ‘*todos aprenden*’ 「みなの人学ぶ」 o ‘*todos se enseñan*’ 「みなの人自分で学ぶ」) といっている(f.68)。

3.4.8. 不定詞以外の動詞非人称形について

上述したように、ネブリハはヘルンデイオ、分詞、不定分詞名詞の三種類を設定している。そのうち、ヘルンデイオは「前置詞 *en* + 不定法現在」に等しい働きをもつという (p. 201)。分詞には、現在分詞 (*amante*)、過去分詞 (*amado*)、未来分詞 (*passadero, hazedero*) の三種類があるとしている (p. 203)。とはいっても、未来分詞は、ネブリハ自身も認めているように、動詞活用形の一部として扱うには難点があったと考えられる (p. 204)。なお、上述のように、不定分詞名詞とは、現在完了、過去完了などの複合時制に用いられる過去分詞を特に指定しての名称である。

モリナはこの部分ではネブリハよりもはるかに詳しい記述を残している。彼は一般論として分詞については、“*En esta lengua no hay propriamente participios. Empero usan de algunos verbos en lugar de ellos, en la manera siguiente*” 「このことばには本来の意味での分詞はない。しかしそれらの分詞に代えて、次のような形で一部の動詞を使う」(f. 69), と述べて、その後個々の項目が特定の活用形から、どのようにして導かれるかを挙げている。以下にその一部をみよう。

それによれば、能動態の現在分詞は、直説法三人称単数形に接頭辞 *In* を付加した形 *Intetlaçotla* ‘*el que ama*’ 「愛する人」となる。これに倣って未来分詞は、直説法未来完了にやはり *In* を付加した形、*Intetlaçotlaz* ‘*el que ha de amar*’ 「愛するであろう人」、*Intetlaçotlazquia* ‘*el que auía de amar*’ 「愛するであつたろう人」となる、等々、動詞幹から派生させるという構成の手法はカステイリア語、ラテン語のそれとなんら変わるところはない。なお、ここでは完了分詞、動形容詞についても同じ派生の規則を挙げ、それぞれの形について言及している(ff.70 y sigts.)。

モリナはまた、現在分詞についても不定詞と同じ扱いをして、もう一つの現在分詞で接尾辞 *Tica* を加えて派生させられる形、*Nitetlaçotlatica* ‘*yo estoy amando actualmente*’ 「私は今は愛しているところだ」、*Onitetlaçotlaticatca* ‘*yo estaba, estuue y auía estado amando*’ 「私は愛しているところであつた、など」には、不定詞と同じ扱いをして、叙法や時制を与えている。これも一言語の文法をまったく異質なもう一つの言語の分析に充当しようとしたその結果の現れであり、このナワトル語の二つの活用形は動詞人称形の機能を強く帯びたものと思われる。また、モリナはラテン語の動詞活用表を忠実に継承して、*participio de futuro en Rus* 「未来分詞 *Rus*」、*participio del tiempo en Tus* 「完了分詞 *Tus*」、*participio en Dus* 「動形容詞 *Dus*」などの区分を設けて、それぞれの場合にナワトル語でどのような動詞活用形式が対応するかを説明している。

3.4.9. ラテン語への言及

モリナには、上述したように、しばしばラテン語に依拠しようとする態度がみえる。たとえば、繫辞動詞を扱う場合でも、カステイリア語 *Soy, eres, ...* とせず、*“por lo qual se suple entonces el verbo Sum, es, eres, sumus, estis, sunt. Ex. niqualli ‘yo, suple soy, bueno’”* 「したがって、そのときには、動詞 *Sum, es, est, sumus, estis, sunt* を補う。例. *Niqualli ‘yo - soy* を補い - *bueno’*」(f.22) とするような場合である。

形態素の記述の点でも、モリナはラテン語の語構成を例に取り上げて、ナワトル語の現象を説明しようとする。彼は、名詞と動詞は二種類の音節 (*síllaba*) から成り、語相互間の意味的区別を設定する役目を果たす *síllabas seruiles* 「従属音節」と他にもう一種類の音節 *rayz* 「語根」とに分けら

れるという。名詞では、Piltzintli ‘muchacho o niño’ 「青年あるいは子供」のうち -Tzintli が síllaba seruil であるといっている。もう一つの要素 pilli ‘noble persona’ 「高貴な人」はこれを rayz 「語根」と呼んでいる。これに続いてモリナは、ラテン動詞の活用形を例に引いて、síllaba seruil と rayz とを説明している。彼によれば、Amo, amas, amat... となる活用形では rayz は Amo で、これはそのまま完全な形式で síllaba seruil を付加することはない、とする。しかしながら、この rayz の後ろに síllabas seruiles を付加してみると、それによって、人称、叙法、時制、数、などの区別が可能になり、ここから、その音節を付加された形の Amas, amat には、それぞれ、直説法、現在、単数形で、二人称と三人称の資格が与えられる、と説明を敷衍している。彼はここで、Amamus, amatis, amant を挙げるだけに止まらず、その他の活用形や動詞などを挙げ、ラテン語の諸形式をもとに、この二種の機能単位の存在を説明しようとしている。当然のことながら彼は、一語形においては語根は一個であるが síllaba seruil は複数もありうること、また語根は変化することがあること、などを指摘している。ただこの二要素の機能に言及する場合にも、ナワトル語そのものについての実例が一例だけしか与えられていないのは、奇異に思われる(ii. ff. 29-33)。

4. まとめ

1) これまでみたことから明らかなように、ネブリハはモリナによって知られ大いに用されている。これは、ネブリハへの直接の言及(ff. 6, 11, 30)に加えて、*Arte* で用いられた言語事実の分析・規則化の方法のなかにも、ネブリハへの依存の大きさを読み取ることができる。

2) ネブリハは15世紀末に『ラテン語入門』^(註23)を、続いてカステイリア語文法』を編み、それまで発展させられてきた中世の言語・文法理論を整理・統合し、これに新しい方向付けをしたといえる。この意味では、ネブリハは新たに発見されたアメリカ大陸の諸言語を観察、分析、記述するための唯一の規範といってもよく、モリナは依拠しうるかぎりその理論的枠組みを尊重して、ナワトル語を記述しているといえる。当時その評価も高かった『ラテン語入門』の著者でもあったネブリハの理論は、おそらくは

一大権威と見做されていたにちがいない。この意味では、モリナは、部分的であっても、ナワトル語記述の最初の段階から、制限された立場に置かれたといえるだろう。したがって、モリナとしてはこの既設の理論の枠に入らない言語事実の解釈においてのみ、彼独自の観察・分析を展開する余地が与えられた、ともいえよう。

3) ネブリハへの理論面での依存は、モリナの *Arte* の構成を初め、記述の対象の設定、諸項目の位置付け、文法用語、参照例を求めるべき第三言語の決定など、*Arte* の性格をも規定する。言い換えれば、一言語整理の基準が、構造の異なるもう一つの言語の記述に用いられている、ということである。しかし、*Arte* 全体を通じて、ナワトル語の「抱合語」としての特徴が見事に示されている、といえるであろう。

つまり、ネブリハはイスパニア人のためにまたカステイリア語を学びたいと願う外国人のために、その *Gramática* を編んだ。したがって、そこに組み込まれた理論や体系を理解させるためには、基本的な知識・概念を随時に提供することが必要となり、単に言語事実を解説するだけでなしにそれをいかに規則化するか、という点にも言及することが多い。このようなカステイリア語の言語事実の理解の方法が、ナワトル語への理論面からの接近、理解に役立ったと思われる。モリナとしては、ネブリハの理論に依拠できると判断した域までは理論的な解説を加える必要がなかったわけで、それ以上の新たな分析、解説が必要と判断した部分について、ナワトル語の記述を行えばよかったといえるであろう。このようにみると、モリナがネブリハの立てた枠組みをこえてなお記述を深めている部分に、ナワトル語の特徴が現れている、といえるのである。

4) ネブリハはその *Gramática* を編むことの目的の一つに、“mi pensamiento y gana siempre fue engrandecer las cosas de nuestra nación” 「私の考えと願うところは常に我々の国の事々を偉大に高めることであつた」(p. 112) があるとして、カステイリア語の基礎を固め、慣用の整理を行いそこに規範を設定し、これによってカステイリア語に市民権を与えようとした。このように、俗語に文法を創出しようとする意識は、ネブリハに先立ち、すでに14世紀にイタリアにあったといわれている^(註24)。しかしこの意図は15世紀にイスパニアで実現された。モリナについても、y pidió licencia para poder ymprimir vn arte que auía hecho y compuesto en

las lenguas mexicana y española, atento a que es necesario, vtil y muy prouechoso para los ministros del sancto Euangelio y aprouechamiento de los naturales en las cosas de nuestra sancta Fe católica

「したがって彼はメキシコ語とイスパニア語とについて作り編んだ一文典を印刷するための許可を願い出ましたが、これはこの書物が、聖なる教えを説く使者達にまた聖なる我らがカトリックの信仰の事々に原住民達が親しむのに、必要にして有用でありかつまた効果が大きいことに鑑みてであります」(f.ii), として、その編纂の意図が明らかにされている。ここでは、通時的な記述の可能なカステイリア語とそれを望みえないナワトル語という違いはあっても、モリナのこの文法書の編纂によって、アメリカの一言語が時間・空間的にその位置を確保したという事実は、ネブリハの理念の発展の結果として重要な意味をもつのである。

5) ネブリハの文法記述の立場は次のような発言のなかに読み取れるであろう。彼は一致の現象について, “Este concierto de las partes de la oración entre sí es natural a todas las naciones que hablan, (...) ; mas, assí como aquestos preceptos son a todos naturales, assí la otra orden y concordia de las partes de la oración es diversa en cada lengua 「この品詞相互間の呼応はことばを用いる全ての人々に自然に備わっていることである。(...)。しかし、これらの規則が全ての人々に自然に備わっているのと同時に、他方では、品詞の配置と呼応とはそれぞれのことばによって違うこともある」(p.216) と述べ、言語の基本的な性質を具体的に指摘している。また、文法の目的については, “Todo el negocio de la Gramática, (...), o está en cada una de las partes de la oración, considerando dellas apartadamente, o está en la orden y juntura dellas.

「文法の役目は、つきるところ、(...), 品詞の各項一つずつをみて、それを個々別々に考察するか、それともそれら品詞の配置とその繋り方をみるか、のいずれかにある」(p. 223) と述べ、そこに彼にとっての言語普遍 (universales morfológicos と universales sintácticos) の理念が明らかにされている。これに、伝統的に維持されてきた「類似」(analogía) の概念をも加えて、言語事実を分析・記述したネブリハの文法理論は、ナワトル語をはじめ多くのアメリカ大陸の言語の記述にも有効に作用し、文法記述に新たな展望を開くことにもなった、といえるであろう。

6) あわせて、このネブリハの文法理念やその方法論が、イエズス会宣教師ロドリゲスの「日本語大文典」(長崎, 1604-1608), 「日本語小文典」(マカオ, 1632年) ドミニコ会宣教師ディダゴ・コリーヤドの「日本語文典」(ローマ, 1632年)などを初めとするキリシタン時代の日本語研究にも、直接につながっていることは、それらの著作をみれば一見して明らかであろう。ネブリハが、「ことばを異にする人たちがカステイリア語を学ぶのにも役に立つ」といってその文法書を出版したが、それがその後、一世紀を経てはるかアジアの東端のことばの文法書・辞書の編纂にまで活用されていることを見ると、彼の『カステイリア語文法』は、なお大きくその輝きを増すといわねばならない。

1995年1月

註 記

1) Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua castellana*, Estudio y edición de Antonio Quilis, Centro de Estudios Ramón Areces, Madrid, 1989 をテキストとして用いた。以下、本文に挙げたページ数は、すべてこの Antonio Quilis の校定本のものである。以下、*Gramática* とする。

2) *Gramática*, p. 114.

3) 本稿の作成にあたっては、*Arte de la lengua mexicana y castellana por el reverendo padre Fray Alonso de Molina* (Colección de incunables americanos, volumen VI), Madrid, Ediciones Cultura Hispánica, 1945. を基本参照文献とした。以下 *Arte* とする。

また、上記の稿本からも明らかなように、この文法書の標題は『メキシコ語とカステイリア語文法』となっている。一方、現在ではナワトル語の諸方言の総称として「メヒカーノ語」が使われ、記録上の古典語にのみ「ナワトル語」が使われているようである。そこで本稿では、モリナが記述の対象とした言語の体系を「ナワトル語」と呼ぶこととする。

また、テキストの一部の引用に際しては、原文を尊重しつつも、必要な場合には、現代イスパニア語の正書法にしたがい、アクセント符号などは付け加えた。

なお、本稿中への引用文末尾の f. は folio(稿本の一葉)を、v は verso は各葉の裏頁を示す。

なおここで扱う「ナワトル語」は、類型論的には「抱合語」に属する一言語である。

4) Alonso de Molina とナワトル語研究におけるその位置付けについては、ジョージ・ベデル、「ナワトル語のすすめ」月刊『言語』(1988-1989), Vol.17, No.11 - Vol.18, No.4., 大修館; Fray Alonso de Molina, *Vocabulario en Lengua Castellana y Mexicana y Mexicana y Castellana*, edición facsímile, Editorial Porrúa, S.A., México, 1992 にみられる Miguel León-Portilla の前書き (Estudio preliminar,

xiii-Lx), などが参考になる。

5) *Gramática*, pp. 117-118.

6) *Id.* p. 239.

7) *Arte*, 前書き三葉とそれに続く ff. 1-5.

8) *Id.*, ff. 5-6. メキシコ征服後多くの文法書が書かれたが、これらはすべてヨーロッパで行われていた伝統的な古典語文法、特にラテン語文法の枠組みに厳密に依ったものであった。従って、新たに発見された言語の音声をラテン語の文字で記述すること、これまったく当然のこととして、そこには大きな疑義も生じなかったものと思われる。キリシタン時代の南蛮人宣教師の編んだ日本語文典などでも状況は同じで、たとえば、ロドリゲス『日本語小文典』(上・下)、池上岑夫訳、岩波文庫、1993. にも、日本語の音声をラテン文字で表示することから生じる不都合、などについての記述はないようである。

9) ギリシア語に八品詞を設定する理論は、すでにアレクサンドリアの学者、これに加えてストア派の後の文法学者の間に発達していたと考えられる。この代表的存在が、デイオニシウス・トラキア (Dionisius Tracia, c. 170 - c. 90 a.C.) で、彼は、「文法をより確かな土台のうえにすえた」文法家であった (R.H. ロウビンズ著・郡司利男訳、『ヨーロッパ古代中世文法論』, 南雲堂, 1962, pp.35-44.

ラテン語文法での品詞分類は、ドナトゥス (Donatus) や、プリスキアヌス (Priscianus) の理論が基本的なものと考えられている (同『ヨーロッパ古代中世文法論』, pp.58-64)。

10) 一般に、アメリカ土着語の文法書を書いた当時の宣教師たちが、手本、典拠とした文法書が、ネブリハの『カステイリア語文法』なのかそれともそれよりも早く出版されていた『ラテン語入門』なのかについては、議論のあるところである。ただ、モリナのアワトル語の品詞分類においては、前者『カステイリア語文法』とは明らかに違って、後者に完全に一致していることをみれば、モリナにとっては、『ラテン語入門』に依拠するのが、アワトル語の言語事実を分析・記述するのに好都合に思えたのであろう (Manuel Alvar, "Nebrija y tres gramáticas de las lenguas americanas, Náhuatl, quechua y chibcha", *Estudios nebrisenses*, coordinados por Manuel Alvar, Ediciones de Cultura Hispánica, Madrid, 1992., p. 320)。

11) 上掲『ヨーロッパ古代中世文法論』, p.40.

12) ラテン語文法での格変化で、特に奪格の扱いについては、R.H.ロウビンズ著、中村完・後藤斎訳『言語学史』研究社出版、東京、1992, p. 62.

13) *Gramática* は9章 (冠詞) 以降は動詞を扱い、それが10章から15章 (pp.196-206) に及んでいる。しかし本稿では動詞は別項での扱いとした。

14) *Gramática*, p. 211.

15) *Arte*, ff. 80-81.

16) *Gramática*, p. 209.

17) *Arte*, f. 73.

18) 間投詞は古典語文法では副詞類の一つとして取り扱われていた。これを独立した語種としたのはプリスキアヌスが最初であったといわれる (上掲『ヨーロッパ古代中世文法論』, p.62; 『言語学史』 pp. 61-62.)。

19) *Gramática*, p. 197.; 上掲『言語学史』 pp. 59-60.

20) *Gramática*, p. 36.

21) *Gramática*, pp. 36-37.

22) 不定詞の形態的な特徴については、英語による近代ナワトル語文法では ‘Stem’ といった用語が用いられている場合もある (Thelma D. Sullivan's *Compendium of Nahuatl Grammar*, University of Utah Press, Salt Lake City, 1988, pp. 45 y sigts.)。

23) Elio Antonio de Nebrija, *Introductiones latinae*, Salamanca, 1481. をいうが、この『ラテン語入門』は、著者ネブリハ自身の手で、カステイリア語に翻訳され、1492 年前後に出版されている。この翻訳を行う過程でネブリハは、ラテン語文法に準拠してカステイリア語に「文法」を創出することへの自信を深めた、ともいわれている。

24) *Gramática*, p. 91.

主たる参考文献

Alvar, Manuel: *Estudios nebrisenses*, coordinados por M. Alvar, Ediciones de Cultura Hispánica, Madrid, 1992.

Carochi, Horacio: *Arte de la lengua mexicana* (México, 1645), UNAM, México, 1983.

Córdova, P. Fr. Juan de: *Arte del idioma zapoteco*, Imprenta del Gobierno, Morelia, 1886 (Reprint, Ediciones Toledo, INAH, México, 1987).

Guzmán B., Ignacio: “La lengua ¿compañera del imperio? Destino de un presagio nebrisense en la Nueva España”, *Cuadernos Americanos*, 37 (1993), Vol. 1, Nueva Epoca, México, pp. 148-164.

Hernández de León-Portilla, Ascensión: “Nebrija y las lenguas compañeras del imperio”, *Cuadernos Americanos*, 37 (1993), Vol. 1, Nueva Epoca, México, pp. 135-147.

Karttunen, F. and Lockhart, J.: *Nahuatl in the middle years*, University of California Press, Berkley, 1976.

Kukenheim Ezn., Louis: *Contributions à l'histoire de la grammaire italienne, espagnole et française à l'époque de la Renaissance*, H & S Publishers, Utrecht, 1974.

Lapesa, Rafael: *Historia de la lengua española*, novena edición, Edit. Gredos, Madrid, 1988.

Molina, Fr. Alonso de: *Vocabulario en lengua castellana y mexicana*,

Colección de incunables americanos, Vol. IV, Ediciones Cultura Hispánica, Madrid, 1944.

-----: *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*, edición facsímil, Edit. Porrúa, México, 1992.

-----: *Arte de la lengua mexicana y castellana*, Colección de incunables americanos, Vol. VI, Ediciones Cultura Hispánica, Madrid, 1945.

Nebrija, Elio Antonio de: *Diccionario latino-español* (Salamanca, 1492), Puvill Editor, Barcelona, 1979.

----- *De vi ac potestate litterarum*. Introducción, edición, traducción y facsímil de Antonio Quilis y Pilar Usábel, SGEL, Madrid, 1987.

----- *Gramática de la lengua castellana* (Salamanca, 1492); Edición de P. Galindo Romeo y L. Ortiz Muñoz, Junta del Centenario, Madrid, 1946; Edición de Antonio Quilis, Editora Nacional, Madrid, 1980; Edición de Antonio Quilis, Editorial Centro de Estudios Ramón Areces, Madrid, 1989; Edición de Miguel Angel Esparza y Ramón Sarmiento, Fundación Antonio de Nebrija, Madrid 1992.

----- *Introductiones latinae* (Salamanca, 1481), Universidad de Salamanca, Salamanca, 1981.

----- *Reglas de orthographía en la lengua castellana* (Alcalá de Henares, 1517). Estudio y edición de Antonio Quilis, Bogotá, Instituto Caro y Cuervo, 1977.

----- *Vocabulario español-latino* (Salamanca, ¿1495?), Transcripción crítica e introducción de Gerald J. Macdonald, Madrid, Castalia, 1973.

Real Academia Española, *Gramática de la lengua castellana 1771*, Edición facsímil y apéndice documental de Ramón Sarmiento, Editora Nacional, Madrid, 1984.

Santo Tomás, Fr. Domingo de: *Grammática o arte de la lengua general de los indios de los Reynos del Perú*, Edición de Insitituto de Historia, Lima, 1951.

Sullivan, Thelma D.: *Compendio de la gramática Náhuatl*, UNAM, México, 1976.

Zamora, Juan C.: "Ideología, filología y lingüística en la gramática española del Renacimiento", *Hispania*, 70 (1987), pp. 718-723.

ジョージ・ベデル, 「ナワトル語のすすめ」, 月刊『言語』(1988-1989), Vol. 17, No.11-Vol. 18, No. 4. 大修館.

ディダゴ・コリヤード, 『コリヤード日本文典』(大塚高信訳), 風間書房, 1957.

クリストバル・コロソ, 『コロンブス航海誌』(林屋永吉訳), 岩波文庫(428-1), 1977.

梶 茂樹他, 「文法カテゴリーと認識」, 月刊『言語』(1993), Vol. 22, No. 10. 大修館.

P.O.クリステラー, 『イタリア・ルネッサンスの哲学者』(佐藤三夫監訳), みすず書房, 1993.

C.ランスロー・A.アルノー, 『ポール・ロワイヤル文法』(南館英孝訳), 大修館, 1972.

増田義郎他編, 『ラテンアメリカ世界』, 世界思想社, 1984.

R.H.ロウビンズ著, 郡司利男訳, 『ヨーロッパ古代中世文法論』, 南雲堂, 1962.

R.H.ロウビンズ著, 中村完・後藤斉訳, 『言語学史』(第三版), 研究社出版, 1992.

ジョアン・ロドリゲス, 『日本語小文典』(池上岑夫訳,) 岩波文庫(681-2), 1993.

田中克彦, 『ことばと国家』, 岩波新書(175), 1981.